

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 鈴木智行

本論文は、東京の都市形成を、三菱による都心部丸の内の開発（第1部）、都市計画法の成立事情（第2部）、両大戦間期の板橋で主に工業用地を生み出した区画整理と洗足風致協会という郊外の都市化の象徴的な局面（第3部）の3つの切り口から捉える6つの章からなる。これらを通じて、東京の都市形成が、都市公共団体である東京市以外の、企業、東京府、旧住民、新住民といった様々な主体によって担われたことを明らかにする。そして、市域にとらわれない都市化を想定した都市計画法がこれら諸主体の活動を容易にしたと、従来その効力の限定性が強調されて来た都市計画法の都市形成への貢献を指摘する。

第1部では三菱史料館所蔵の多くの原史料を分析し、第1章で三菱の丸の内の経営が通説に反して初期から利益を生み出していたことを解明して、空地の利用や、煉瓦造のオフィスビルに当初は社外の企業を低賃料で誘致し、後に関連企業並みの賃料に引き上げたなどの経営実態を示し、第2章では丸ビルの建設に至る大正期のオフィスビル需給の実態をはじめとする新たな知見を加えた。第2部では、第3章で従来の研究で利用されていなかった公文書を利用して、都市計画法に、内閣法制局での調整の過程で、わずかに先行した道路法と共通する受益者負担の概念が導入されたことを明らかにして、財源の裏付けを持たない法律として成立したという通説を批判し、第4章では都市計画法によって進められた東京の当時の市域の外での道路整備の過程を検討して、従来都市整備の上での役割が軽視されていた東京府や府会の主導性を強調する。引き続き都市計画法体制の運用過程をたどる第3部では、区画整理組合の膨大な原史料を丹念に分析して区画整理の実施過程を具体的に示した第5章で、市域編入前の行政村を担っていた在来住民のつながりが区画整理による工業用地供給に大きな役割を果たしたことを明らかにし、非公開の風致協会所蔵文書の特許を許されて利用した第6章では、在来住民が旧村のつながりを重視して結んだ電鉄会社との契約を、新住民を代表して地域の自治に貢献した人物が更改することによって、洗足池を公園として維持する枠組みができ上がったことを示した。

本論文で解明された事例は、あくまで東京の都市形成の上で典型的な成功例であり、それが成功した事情、他の地域との対比、あるいは分析の対象期間のうちに東京の市域がほぼ都市計画法による都市計画区域にまで拡張された事情など、本論文で得られた知見に基づいてさらに論じられるべきことも多いが、建築史、都市計画史も含めた先行研究を踏まえ、新史料を発掘、活用して企業や住民の動向に目配りしつつ東京の大都市形成に関する一つの歴史像を提示した本論文の貢献は大きい。よって、本委員会は本論文が博士（文学）の学位を授与するに値すると判断する。